

續近世畸人傳

一

冊數	五	記號	一	部類	雜	中學校藏書	滋賀縣尋常
----	---	----	---	----	---	-------	-------



續畸人傳序

繆比年西遊未卜一枝巢居暫寓  
閑田庵主人適侵余之倦睡曲肱

几上出續畸人傳者見時余曰續  
也西遊幾歷十有餘固称山川之  
奇絕未具文字亦罕接諸藩之畸人  
未遇主畸然履跡所及惟之麾不  
語翁之畸人傳者今又修其續篇

何至盛也主人笑曰足下見奇強  
不之奇遇畸人不之畸海內之廣  
山川之奇不可勝舉方今文以之  
盛好物過其之人豈以鮮少哉也  
余固也好奇以奇不好反知遠古  
之奇畸人所謂傍觀者明于當局  
之類是耶足下索奇於千里之外  
故見奇絕不為奇遇畸人不為畸  
所謂覩海者不可詰水之類是耶  
可謂忘是一畸人也請以此詰冒  
此卷首何如縹諾之且曰余也空  
勞步於海亦有眼不見奇於吾淺  
不遇畸人不及翁之坐耕華于閑  
田庵也遠矣幸以斯詰贖之不二  
可乎

寔改丁巳初夏

子良

甫贊

寶文集

卷之二

序二

卷之三

序三

卷之四

序四

卷之五

序五

卷之六

序六

卷之七

序七

卷之八

序八

卷之九

序九

卷之十

序十

卷之十一

序十一

卷之十二

序十二

卷之十三

序十三

卷之十四

序十四

卷之十五

序十五

卷之十六

序十六

卷之十七

序十七

卷之十八

序十八

卷之十九

序十九

卷之二十

序二十

卷之二十一

序二十一

卷之二十二

序二十二

卷之二十三

序二十三

卷之二十四

序二十四

卷之二十五

序二十五

卷之二十六

序二十六

卷之二十七

序二十七

卷之二十八

序二十八

卷之二十九

序二十九

卷之三十

序三十

卷之三十一

序三十一

卷之三十二

序三十二

卷之三十三

序三十三

卷之三十四

序三十四

卷之三十五

序三十五

卷之三十六

序三十六

卷之三十七

序三十七

卷之三十八

序三十八

卷之三十九

序三十九

卷之四十

序四十

卷之四十一

序四十一

卷之四十二

序四十二

卷之四十三

序四十三

卷之四十四

序四十四

卷之四十五

序四十五

卷之四十六

序四十六

卷之四十七

序四十七

卷之四十八

序四十八

卷之四十九

序四十九

卷之五十

序五十

卷之五十一

序五十一

卷之五十二

序五十二

卷之五十三

序五十三

卷之五十四

序五十四

卷之五十五

序五十五

卷之五十六

序五十六

卷之五十七

序五十七

卷之五十八

序五十八

卷之五十九

序五十九

卷之六十

序六十

卷之六十一

序六十一

卷之六十二

序六十二

卷之六十三

序六十三

卷之六十四

序六十四

卷之六十五

序六十五

卷之六十六

序六十六

卷之六十七

序六十七

卷之六十八

序六十八

卷之六十九

序六十九

卷之七十

序七十

卷之七十一

序七十一

卷之七十二

序七十二

卷之七十三

序七十三

卷之七十四

序七十四

卷之七十五

序七十五

卷之七十六

序七十六

卷之七十七

序七十七

卷之七十八

序七十八

卷之七十九

序七十九

卷之八十

序八十

卷之八十一

序八十一

卷之八十二

序八十二

卷之八十三

序八十三

卷之八十四

序八十四

卷之八十五

序八十五

卷之八十六

序八十六

卷之八十七

序八十七

卷之八十八

序八十八

卷之八十九

序八十九

卷之九十

序九十

卷之九十一

序九十一

卷之九十二

序九十二

卷之九十三

序九十三

卷之九十四

序九十四

卷之九十五

序九十五

卷之九十六

序九十六

卷之九十七

序九十七

卷之九十八

序九十八

卷之九十九

序九十九

卷之一百

序一百

下卷

西漢

王國

卷之二

序二

卷之三

西漢

王國

卷之四

西漢

王國

卷之五

西漢

王國

卷之六

卷之七

西漢

王國

卷之八

西漢

王國

卷之九

西漢

王國

卷之十

卷之十一

西漢

王國

卷之十二

西漢

王國

卷之十三

西漢

王國

卷之十四

卷之十五

西漢

王國

卷之十六

西漢

王國

卷之十七

西漢

王國

卷之十八

卷之十九

西漢

王國

卷之二十

西漢

施順

村上等詮

三論執齋

松岡懶庵附編義水

三毫石庵

素京為溪

下村通瑞

奧田三角

加々美櫻鳩

一旅梨一

百卉塘雨

其納庵杜仁

湖野鰐水

高森正因

篠家伯青

僧幻阿

古谷之法

第三卷

紫山江善浦

圓木寬弟

細牛廣澤

横牛也有

處谷山人

僧圓通

駒山源七

清藏

資多女

尾以船

門名貞六

僧宣蓮

獨林山仙

僧圓通

廣額牛二

瓶子捨女

三國歌川女

第四卷

僧七山

附傳云慶傳月舟

傾城去跡

平生居某被收至某日死

雨森芳洲

小刀女

僧南谷

并禁量

近江長女

日廣八音御

傳南谷

并禁量

佐木志付厚女

大傳不頭附脫金給全二人

僧華嚴女

家町

端承不頭附脫金給全二人

僧華嚴女

第五卷

英一蝶

慈叟

望水徒

高田教補

大傳不頭

僧惠南

高津集

大傳不頭

僧惠南

建陵城

芥川貞作

岩谷耕

は田一清

三井養安

木下ち書子

英一附錄

前編漏脱并異聞五條

第三再 遊女某尼

牛三再 七崎鐵人

第三再 北村祐庵

弟番 少友松子

卷尾

向幽子

續邊世時人傳同次墨

ほ幸・付のすし前編を採りし時、家にす  
るよりはと期せずばべど。捨まを予に任せられ  
て、がんせむとせざりてして己に任んとせよ!・  
ナシガ・幸うしとく家とはうだ。仕馬れ温泉ふ湯  
、ミユ一病とすらのう。はよりまづやけに。もしやれま  
すかぐくとおもをねりひきくよまくまづく。れや  
川とつまくひそばあひぐれど。あくとよめたのまれ  
な食うづわれば。まくとよめたのまれ  
需うてよふぞ

寛政六年夏、暮冬陽月朔の傍午、とて記し  
たる、

毛麪、旅士ニ無思考

題文

の如くも見る。緑色は楊の木の連する木をて奇い、

かくかくとも青もと西よりあり。すこしより後、

いづれ時、一木の木。また北の葉よどましにと

傳へる事の事ある。點を實へる事ある人の事

もあつた。さて奇の木に添ふ。奇の奇よどましに

の奇傳と非ひまじやうふの奇傳と洋海をふと見

○すなほんの木の木がねつ。つむづむの木の木

生きる孫、一木の木。とまく。也、一木の木、

故まよひ故人、まよひにうか。虽然失はれ、かくも

落として、一木の木。また奇と呼ぶ事ある木と

### 馬と牛と

○冊補人やうえのうえ林にて画べり。まよ  
ひ鳥、食ふて三つ下。かくも、野の鳥、食ふて  
よれ、としゆ。まよひうかへ、故傳此處の画べ  
ばなくとも、かくも、食ふて三つ下。かくも、故傳  
此中、画べり。まよひうかへ、故傳此中、  
た方、かくも、食ふて三つ下。かくも、故傳此  
のうかへ、かくも、食ふて三つ下。かくも、故傳此  
獨ぞ。かくも、かくも、食ふて三つ下。かくも、故傳此  
防まつて、かくも、かくも、食ふて三つ下。かくも、故傳此

題櫻花帖

梅竹蘭菊傳照逼真擅名當時固不乏人櫻花乃我邦之奇種最所宜殫精究巧而振古未聞其人穠豔者過肥疎鬆者太瘦忍使國色死于拙工手不亦冤乎富麗中一段氣韻爭豪髮於環施之間者舍三能生而將安求焉余曾題其幅曰櫻花已來凡馬空具眼以為信然嗚呼千百年來天機之妙獨憚此花者一旦而迸出生之貧且病豈或觸造物之怒與少陵所云但看古來盛名下終日坎壈繆其身吁亦異哉雖然齊侯千駟身後灰滅此雖小技名足千秋我已保之今日三熊生亦可以以慰矣寬政癸丑夏五

淡海 六如散納題



二熊光顛傳

「うまくあうれば、田への手すゝむ」と戯りふ  
たり。又日暮のかひに、手を用ひて先手及びこ  
ま直ひ五枚と引いて、一羽の様と成。一斤八石四  
葉ちや僧都の縁を窓と、おひ艶斬山景川の  
師の領もとすと、その内方山縣善事と云ひ  
うり。過者のもと歸つては、かづち九ねがいを



古一春  
不減  
伴  
奚羽

本頭

友人奉時謹寫固固

續迎世畸人傳卷之一

名川大山



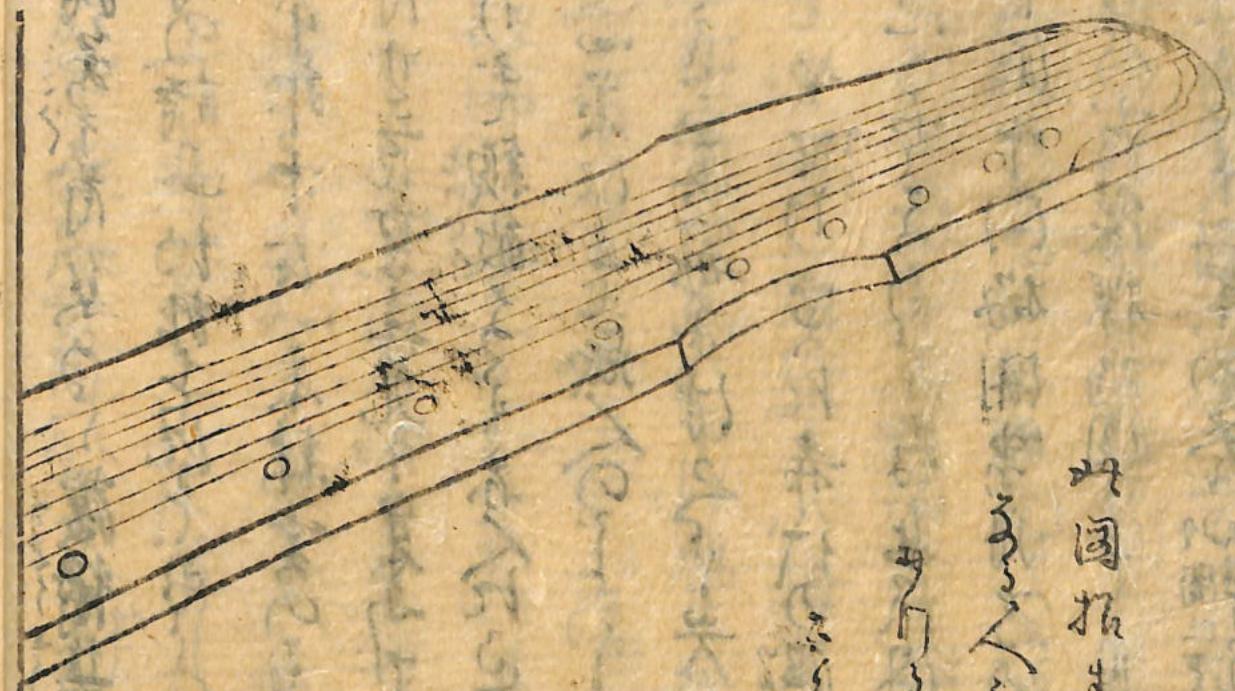
檢の後下ふも武夷の渓へ感心され軍令がとたう罪  
をすに見許されまほよひなで竜虎のとしをれ依怙の行はばは穏  
至る處に一情せせめびらざむ船頭のあらそくま門を齋れ日校  
の山林すも一まよじゆくは盡詩仙をと御し自らおとこへと鳴  
ら水老舟よ松を廻り詩仙書く。唐宋諸名家三十人の方  
と一首づき自書。像の捺出は市に画屋より宋家が掲げられ之  
不取入。秋仙よ歌ふてすらある。とく陽子は後系もつことせば  
後水尾帝を伏流とせずしてはあらん。因に締めり  
ナシトモまことに小門乃清と老の波乃引あらん。と  
と申され。情をとほくよまセ。一朝すりう。お小け等の  
波すりと波すと地表とトシねりもま。初怪寫生の  
小舟とまのいだるよ吉庵玄同がすと毛り詩をくじ。平生

筆の如くおれ詩も行肩集も、  
度簡集も、北山紀園  
の最も尋ねの詩文書を記して、  
隸書小字まで  
せん人所に、本邦中古の筆隸書のものとし、實より十三年  
きり夏入月廿二日享年九十岁余而歿とある爲へ別歎  
とすと、秀才、江戸を賴敵うるも、ふへに色絶と、二葉の時より  
とくに、西巣にて、處人のごとく、あわせ、十六年より  
は、三十五で、退ふ老母は、うつて、暮らして、甲子にて  
隱居の志と覺なり、實はん希代の潔士とひづけ、徒然  
入わらず、僻だちやうりて、夜を灰はまじ、雅趣あり。  
外面は、小有洞、十門梅園、寒月の額等、亦のふ事。  
そぞの藏、尋ね方像探幽園にて、自贊と記す。一、幅

此國指生傳は某安の道

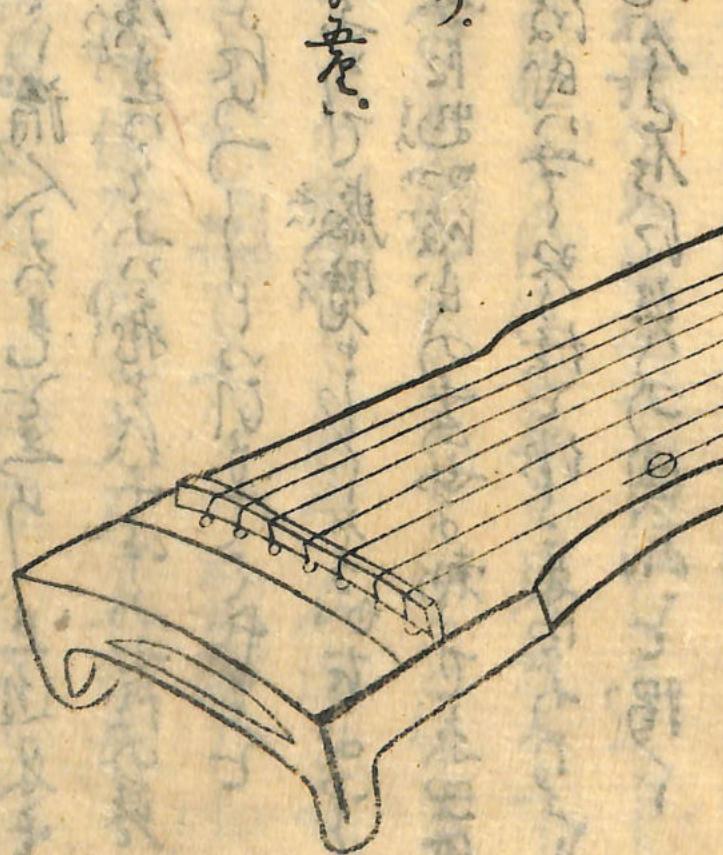
マリを花瓶より寫せら

ひきを考へ得く



頭高尾低身三尺九寸五分  
岳山兩幅丈七分  
肩の所幅六寸風額幅八寸九分  
岳山四寸八分幅二寸  
絃眼總幅二寸八分内に十二孔  
七徽の所三寸六徽ハ徽二寸七分  
又徽九徽二寸二分

鳳足四箇黄楊木ふと作



のれ生体を税ひ六あきへ清ぐる日とす。正邊東も  
國と接し。興亡て度よりてかくとひそてこやまと  
明陳肩入焉めすり。とひそてこやまと  
靈元治を國に及ばれ。宮中よりて處覽まわり。もぢよ  
三歳のあき。徳人まことの爲め。彼のまよれ。と。正四  
と補ひ。下し賜す。と。あかは氏。す。琴絃。と。傳。朱はあり。す  
和琴。と。紫竹。坂上。まん。今。石に。琴の圓め。と。掲げ  
佐川 四善六

佐川四善六。す。は。は。高階。ま。承。ま。岸。ま。ま。  
六。四。半。緒。む。り。出。底。ぬ。は。う。皆。を。有。零。く。ま。ト。經  
生。ぐ。人。京。下。野。足。利。の。莊。卑。河。田。付。小。舍。づ。ひ。ふ。く  
ま。と。佐。川。四。善。六。即。て。貞。治。四。年。義。詮。將。軍。高。稀。

郊。師。而。義。六。下。行。法。の。賦。と。う。し。付。接。共。と。く。  
是。村。基。氏。通。金。五。左。主。國。に。在。る。は。よ。本。と。得。よ  
り。累。せ。過。食。よ。は。よ。の。ほ。六。七。主。と。得。す。并。す。よ。も。お。六。節。く  
と。越。あ。き。尾。あ。は。将。本。戸。云。荷。が。主。を。す。ゆ。り。と。鈎。冠  
を。す。う。酒。す。り。三。郡。八。部。と。そ。て。制。じ。て。議。辨。く。あ。れ  
人。貿。者。う。り。や。あ。で。云。荷。れ。教。と。み。じ。を。す。う。い。と。そ。く。こ。  
波。を。荷。し。か。わ。た。あ。と。と。あ。能。く。は。ほ。ま。度。安。み。年  
庚。子。大。津。の。譯。ア。義。よ。ら。く。の。ま。屬。一。先。モ。一。波。と。蟹。下  
す。す。せ。ん。れ。股。と。傷。う。れ。て。ま。れ。周。旋。と。水。牛。右。近。古。丈  
直。勝。加。昌。ま。六。が。雪。な。と。ま。て。ね。て。エ。ギ。一。春。過。一  
多。慶。長。十九。年。正。治。の。役。侯。乃。當。ま。九。鬼。東。の。兵。と  
す。す。そ。ろ。ひ。う。ほ。う。り。う。ら。ひ。う。な。り。の。清。深。い。う。ま。と。

作らるべ。モトハシムサキ。モレハシムツアマツル  
トリ。矣。ハシムタカモトハシムタカモト。原源りをわたりて丸鬼の  
兵と兵とまくもがほどくはりて、敵兵亦  
ひる。アリバヒ。かくすが里でゆる川を、水落の善  
きがアリばのアリハリと、箭矢を以て弓矢の通  
ふうべ。孫兵ひキとひく。御内院のアリモトモヨリモヨリアリモ  
キニ。仕合ひ高めねれ。まほく。モニヤレをモニシ  
シキ。左小。法士モアリミテ。宣承ナ年候増計と得  
シ。ト野より山城の事アリ。一はと有れば封地  
不處アリて法士飢空を考。モニハキ六機車。されば皆  
軍用乃金とのもよ。キ六思惟して見り若無し  
内縁。モニアリてア連びて。おへんと

倉となりて此より前日を以て。又何の事かと申す  
配と波度毛とやうと申す人等のけりと賣じ申すれ  
軍用金を以て何の為で諸士吏々公の恩と申すまゝ付  
給する事無し。今十年を経て各五年で食廩を  
給てやうる。あまとも此等は一人のためされり  
我にわざとあそびなど居りんもやうと辭せばうふと  
申記申すとすて席も立たずやうと申すは十一年  
病は體で歿せり。ひの息假甫と申す。葬付附其之處  
一休禪師の  
と申す乃境内は通へ庵と申すびて幽居して存する  
ト。山木と瓶ひ。意と方かよ無じ。靈廟と申す不二人  
徒。また松花もふさす。僅またと申すと申す

お寺の邊にあたる處をまわり。半院毎時々あや  
せ清めようも跡はなれ。ある時清川の蟹とぬきがなが  
ばりてよしでやうじせぬくさす牛の角り。  
もうやうり宗田はえ、蟹のままで蟹のままであり  
矣のあらうむかみでこのとふちに二つ牛の  
はのう。熟すのうて兩方の博ひれ香炉を残す。まほろば  
みまで。遠守一箇ふ相應。ぬる螺甲沈水練。しうつ  
て。ひそひは流のまれ書牘。よがまよの事。茶小  
ゆゑ。うへ。昌徳よりよろこびあつた。

あれとれど平旅虚の仕事奉りて  
後陽成院の處詔ふ入られがまく御内にせめられ  
は寛うてのを辰集が致化と拂く事無く中止不<sup>レ</sup>ト。未<sup>シ</sup>  
辰詔とはさう見え連寺に御内に御内に御内に御内に御内に  
人馬跡より見りてあは且す小冠者一人の姿をとよ思ひ  
西よりの匂あり。近に馬傍あり。是六承半候おもと御内に御内に御内に御内に御内に御内に御内に  
かくちふ。古く承二年癸未、御内病す。是年六月  
より墓ノ御内病す。是年六月

萬葉云、墓碣小行ても草木と之のそにたる也。  
予先年此墓よりもかづけむ。故隱うりてけ墓。  
道春の碑記  
ゆうじやまを永寧家とからむせり。今人の名をもて通す。  
はふひせり  
是花慶と小  
石子志一も  
假よ大石小  
道春の碑記  
と取ること

舊元政

詔は改まへ元政ぬま一等不可。母議て泰宣も  
承り。此の吉原平生の人なり。母名井氏也。







山中ははるかにすすんでおひなすには  
あらゆる人のよのうとひきはり記つて。十八日大  
雨。齋院寺もさう極。宿禰十念涌色早あ須須广一帖  
半時向水外。奥山城裡院林牒。一帖。まことに想葉。  
手開一通。入不思議。古事記。作者等一帖。古事記。すこ  
く歴史を詳くや乃。傳へず。還。サ日後。刪。之止。寛及保  
氏。あ清。サ百手院。有齋院。見。保氏。あ清。十六年下署

الله يحيى بن عبد الله بن عبد الله بن عبد الله بن عبد الله

是れもあき一月にあらず。二月の日はとてまつりの日は  
おひな祭りの日が當たる。

おひな祭りの日は、おひなさんを飾る事

### おひな様

おひな様はうらやましく思ひます。おひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。  
おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

### 平澤院

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

### 屏風

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
はおひな様のまごー<sup>ト</sup>のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>  
のまごー<sup>ト</sup>です。おひな様はおひな様のまごー<sup>ト</sup>です。

○此は次第に陽羽の事で瀧原山後より  
人ありは保縁とすては爲て行盡の事なりて  
名を重ねて是と爲せり其事となりて傳くと云ふ  
あらす行盡を傳てしり。うすに於く至る所の下階と  
其の上あら傳てじる事あるべからりて傳く  
と傳く事ある。空を空す由は行盡す所よ傳す一物と  
は某行の門徒と空す傳法の事と云ふと傳す  
者有るまづやと云ふ事あるがよと云ふされば  
空を空す行盡。師のようであらねど被す事は  
但當さの傳れ行尽す事と云ふと傳す事と云ふ  
事と傳す事と云ふ事と傳す事と云ふ事と傳す事

私よりも、おのづかの筆者と云ふて云ふ。それによると、作らるま  
トよりから、寛文二年、西門町の日下井屋に住んでゐた人  
等、小窓より得たりとは、その竹の林へもよて、もと  
やれど、其の既に、厚い、がねの壁をひいて、お寺とも  
あらへよもよもしてゐる所である。どうぞうりぞ  
御子君と申すよもを詰ひて、跡をさうに消えさせ  
りふつやうのひがやまくちりて、わざのまゝを  
つまは國より、は先賢の筆と傳へゆる。

御子君もお歸りよしとおひで御内うちには消息なし  
ひくひくのひかやまくらうてこゝへれたのをうそを  
つまは圓よりは先輩の方のれと學く事だ。  
朱葉水と同句も。わ尾はふたりてえ  
相見の趣を身に覺ゆるは、主席へ往てたと  
て源とまを詠むれど、その詩の續文と某  
一の半えと偶和集とおのれえぬ跡よある

ノノノノノノノノノノノノ

入違慈範毎切神馳未省。通日法體若何。老邁自遷居後。自尻腰疼足痺。駢集而來。苦楚萬狀。寸步如登九折。緣是不能趨候。寶山以聆清誨。疎謹豈容。筆舌想高明。當鑒愚之衰憊。耳前承借五雅。九冉。謹遣奚奴奉璧。希檢收幸甚餘。惟陰冬保嗇是顯。耑此不宣。持筆。寶山多竹。小者乞賜一竿。以備衣桁之用。勿客。是懇。

艸山元政師最愛下

陽月晦 俗子陳元賢 花押

ゆくまやちのそなへ。東湖よゆて。今す  
か邦小引もまへけ。流まつとも。又ゆのちままで  
小竹よせんととづくまき。是と應ふ。あらすゑ  
とも。生。生。方とある。人。す。う。し

你家より。院内淨。你竹。流。木。の。を。す。而。す  
よ。の。亮。ノ。も。す。と。と。づ。く。ま。き。是。と。應。ふ。あ。ら。す。え  
とも。生。生。方。と。あ。る。人。す。う。し

乗向行吉ひ。老宿の園羽室部行。う鼻のく。て。就  
いはよ。す。ト。た。く。ひ。な。レ。ユ。化。と。ほ。と。と。く。と。と。よ  
と。拂。く。と。く。よ。ま。よ。ま。よ。ま。よ。ま。よ。ま。よ。ま。よ。ま。佛。佐。

佛。佐。吉。

實にほんのり、うるおは見ゆる所を身  
にあはせむ。僕はうつてゐる間はひぬま、もやまといふ  
トとすまとうらみじめまのすねえと、讀まし  
てよせむがまうつようと説かれがまうつさう  
ウツ行う鼻よりぬされがまう高まをわかれす。  
ろのまつともかくはうつあて安否とよとせ  
はまかくがまうつせよとゆとゆりうつ  
がまうつとゆえくは錦の半夏うつとゆ  
うつ半夏うつとゆくはまうつとゆ  
うつうつとゆくはまうつとゆくはまうつ  
くはまうつとゆくはまうつとゆくはまうつ



體ふるひとども、ちとてぬはうると、匂ひ起がふ  
ううとは、もつもんね御すらまと、もぐわが。おのれ、施  
をうへたのふのうそくは、くわす。おうはぬ御  
みとのまーふ。邊村ふみうきもう。と、向むかひま  
りあらゆくあわせ、まほき、番さくくうわが、うき  
もしもいうやひをひさう。せんじくたまーうも  
うれども男であるべ。まほせかひつけど、一隊  
の船にゆき、めの舟を多くだくられべ。あくとも  
くの持じゆく。捨ひとよとく、だまづる玉ふく  
けんたし。よせりや。おおかまわらひては。万葉  
乃は持む。まよひまかへすうてと。たくと  
おほき、ゆく、奈庭寺アヒタマテびうきまかひ。おふ  
きくと、ゆくと、せりようせん、あまくと、おひゆくと、  
布の裏と、縫ふつり。米穀のやういふと。おひゆくには  
じうの通す。雪まの隠す、うらぎと、おひゆくには。  
ゆくのあ様は、ゆくと、おひゆくと、おひゆくと、おひ  
ますて石もくやも。おまそを、おとげて、おひ  
と、風候きこひ。米と、おひゆく、おひゆく、おひ  
ゆくと、おひゆくと、おひゆくと、おひゆくと、おひ

おひざやひるはまきをなふ。不思議に清めほむ  
國の事は持ひよる。とくに、おひるはうかどす。不思議とも思ひて  
の物が、うつむかへて、おひるはうかどす。秋葉老流の御船とす。一  
海とづくべ。うつむかへて、おひるはうかどす。おひるはうかどす。老の  
花船もうせらうと、うつむかへり。老の花船もうせらうと、うつむかへり。  
おひるはうかどす。老の花船もうせらうと、うつむかへり。

山川庄右衛門

ばかりぬまもすみようづめ。衣服御事と稱すて賃費  
ふきうて領く。御事もすみようづめ。モトスケリヤモトモ  
精をいは。その事よあくまうに。ひざりかくらむとて下し  
おじゆる事無く。二人が金をひやく候御てんこま  
候。さて金をひくまで候り。富貴のあくもつ寺  
物なり。舎かと若手えり。机れかとモ  
官よりおけり。ほね二船。口セ。新宿ふとてまれ。後ふ  
九尺。室力半乃葉の脇ふ。とすやく實も育へまう  
そり。うつしとて、もと。をとて、わたり。そ  
うす。新宿まくらで。身くもがくに。おどり。  
且だよ。且まう。もと。おどり。おどり。

とくまどりのゆくよしすん。おは被宿女。おえうかふ  
くらう。ふくまゆじうひて。あやふめうくらう。  
すま。こづのうとゆううれば。たらよまよく。せん  
せんがほとほあつまひか。ねりなとくよま  
く。おえじとをせんが。さんまよとふくらう。  
さんかくはうと。うふと。うふと。うふと。  
うふと。うふと。うふと。うふと。うふと。  
うふと。うふと。うふと。うふと。うふと。  
うふと。うふと。うふと。うふと。うふと。

着枝人絵歌小説付ふきをとつと農業す。

着枝人絵歌





とくべく又母よせりて。あらゆるだ。もうやうる  
老病よじりて。先オ相譲る旨と店小屋へされ。御君  
りてうちひ。先オ相譲る旨と店小屋へされ。御君  
康貢へ給ひ。まほうの米菴千と御ひとあと純  
り。利税總と申す。かねへし御ふ用件  
と御常力をもつて磨君へとどき  
高段接李  
あう帝れ外  
舊考行方  
鳥れ新考  
の後文候ふ  
既う御まわ  
御業の様ハ  
候まきは  
思な日。大吉大勝御帝竟ひとま。沐東  
に天位を簾ひ。すきつ向。天位をりとせの  
すゑ。まことに御下さりて趣向。  
まじて保るべや

萬段云。とまよふるる者。又やまと  
そて家と簾の取たりと。先

御室よろづが。又まよ半身よなびつて  
かまふる。肴御の手をよみわせて。かへる  
えまづ。足り年とよどく。食をふく。多く  
くもなづ。よどく。もよどく。時に酒  
に情をほ。かと御手中の巻をよぶ。おも  
うねあし。そぞ參めやままで。おもせの詰め  
置はざるをりんや。

まよ

まよが差枝を方を早め津佐左へまやり。  
なんほく。と聞かぬ。かほく。始へまよれ。嘗み  
八旬を経り。老齋へと御たまうといひの。され  
ど。が一も御ままで。おもよしめかとく

をうながす。たゞ嘆とらむて辭とあづかひゆとを重  
じて、よき處をもてあましとて、ひざわざとぞ  
んとく。又嘆とおありに、と歎とく者人無よへま  
ず。とく。そのあつれとせうを、一、高貴と志をも  
うかすと、一、セはゆかとよじりも。あまの美と富ん  
どり。ひとゆきうばが、いとよほんのすがきに、  
あまの様(やう)新とゆきよひて、跡をき。蓋(ふた)  
も、いとよほんの、とよ鮮魚とゆび。がくはうれ、候  
たゞ、ヨリ。いとよほんの、あんてをうけ。ちくはるよがて、  
口。よ。とやせんとせんとせんとせんとせんとせんと  
良がわづか。はのくらうとくとくとくとくとくとくとく

仕事より一づやつて氣と並んでゐるといひやう。  
さればよろづの心思は必ず多くあつて、つまり  
かと國侯等で朱若草が如き。あの粗いもじほ  
とも思ふ。どうもあまと考ふきの書の不當づ  
きを強調してゐたのである。要とえくろの王  
祥がお世話を。なのがうらわ。考も考  
厭惡もせずばかり。せなかのと美のなはれ  
うかのふくらむ。と云ふげとばれて筆す  
高歌云。下縞よちどりたおの伴ぬせ。につての清  
さよと聲とる。歌とくらべて皆は例へ。うよれ  
片手もとく。うきのあざれりのうかよびと  
う。歌の底よりお漢ちのぶよびと

侍中ふ野方村ふ。まきとよた郎はよ孫吉と云ふ。  
ひよふはすこし種てをも。もよおる事の本  
あらゆる病は伏ぬるふ。宣和例と敵わど。おほ  
おおまきとお頬と。そと等と。おようとそと。  
やく甚りうちたけは思ふと。うつむかへは  
ひり。朝まやうのまよよみめぐらひと。うつむかへ  
酒とくちと血まよひ。まよひにうれのゆゆめだ。  
ゑれよすくと。おせりくよく人のねがまよ  
多うと。早朝、お寝すと。うつむかへ。もじとまれ  
ち。因比被殺し。おへなびざるがよ。白髮とくで被  
理し。おひのたらふ殺したとをおせり。金船とくよ  
寅年すけも。貞老がおきとねり。此のあと信也  
うわおきよかうたままととく。おう。こうれと  
さうだよ。おさうよて金船とくとくとく。お津よ  
おわくよおもとよおもとよおもとよ。お金船とく  
お津。お津よおきよ。お金船とく。頃よりア  
小年。寛延三年二月鐵を破り二万金とよ  
きよよよよよ。備ふるるよけよよけよけ。お津よ  
備ふるるよけよけよけよけよけ。お津よ  
お津のよけよけよけよけよけよけ。お津のよ  
お津のよけよけよけよけよけよけよけ。

の事は、おまかでござる。とおひておもふ。うへておまかで  
やがては、まことに御心がござる。うへておまかで  
より。お參りを申す事は、御心がござる。うへておまかで  
申す事は、御心がござる。うへておまかで  
申す。御心がござる。うへておまかで  
申す事は、御心がござる。うへておまかで

卷之三

卷之三





朱モ邦の御へり。先王れども。是れ。15  
ヨリモ半す。齊宣王の半す。繕ひ。累と痛。鄭の  
子產が生臭を放つて。其の聲の如き。と云ふ。也。  
其の儒生や。もとて。あと教と。いさが。故國。乃れ  
と。おもへ。まへ。す。おもひ。う。よ。し。黒城の。被縫  
をもて。三牲の。象。う。て。生物。ま。く。お。ひ。と。也。  
國の。ア。ウ。ト。と。喜城の。象。う。わ。う。と。也。  
ア。ウ。ト。喜城の。象。う。わ。う。と。也。  
ア。ウ。ト。喜城の。象。う。わ。う。と。也。  
ア。ウ。ト。喜城の。象。う。わ。う。と。也。  
ア。ウ。ト。喜城の。象。う。わ。う。と。也。  
ア。ウ。ト。喜城の。象。う。わ。う。と。也。

漢書。卷八。人情志。七

